

2014年1月

東ティモール・ディリ便り

大阪赤十字病院国際医療救援部

喜田たろう

東ティモールは2002年に独立を果たしたばかりの若い国です。

近年の国際赤十字による同国への支援は、インドネシアに対する独立紛争時から始まり、2000年前後には、赤十字国際委員会の要員として、当院からの2名（看護師、診療放射線技師）を含め、多くの日本赤十字社職員が派遣されました。

かつての宗主国であるポルトガル赤十字の支部、そしてインドネシア赤十字の支部としての活動を経たのち、2000年に東ティモール赤十字社（以下、CVTL）が設立され、2005年同国政府および赤十字国際会議によって承認を受けました。

現在 CVTL は首都ディリに本社、ディリを含む13県すべてに支部を開設し、140人の職員と4000人をこえるボランティアにより、紛争による離散家族支援、給水衛生、災害対応、HIV/AIDS 知識の普及、救急法指導などの幅広い分野で活動を行っています。

（ボランティア管理）

CVTL では、他の赤十字社に先駆けて、連盟が開発中の情報管理システムである **Resource Management System**(以下、RMS)を試行導入し、ボランティア情報の管理を始めています。全国の支部から支部責任者、ボランティア管理担当者を本社に招き、システムの使用法の講習会を開催しています。

しかしコンピューター関連知識の不足や、地方でのインターネット回線の未整備などに加えて、同システムがいまだ開発中であることによる不具合などから、その導入は簡単ではありません。2014年には、管理項目の見直しも含めて、講習会の追加開催が予定されています。



支部ボランティア管理担当者を対象に RMS 講習会を開催

一方、失業率40～50%といわれる状況の中で、できるだけ多くの赤十字ボランティアを確保することも重要な課題です。CVTLの各支部では12月5日の国際ボランティアデーにあわせて、ボランティア記念行事を開催し、長期継続ボランティアへの表彰などが行われました。

首都から車で西へ約90分の位置にあるリキサ県支部では、青少年ボランティアを対象とした英語研修を行っており、今回の記念行事にあわせて、ボランティアによる英語スピーチの発表会が行われ、日頃の成果が披露されました。



(リキサ県での給水衛生事業)

日本政府からの草の根・人間の安全保障無償資金協力による財政支援を受けて、CVTLではリキサ県における給水衛生、生計支援、保健衛生事業を開始しました。

同国では、脆弱な社会基盤が大きな問題となっていて、政府の施策もその多くが首都デマリに集中しており、いまだ地方まで行き届いていないことから、CVTLは地方における給水設備の設置事業を行ってきました。支援対象となったコミュニティはCVTLの事業担当者から設備維持管理の手法を学ぶとともに、管理に必要な基金を積み立てて、将来の保守管理に備えます。

この日、対象コミュニティで行われる伝統儀式に参加するため、村人たちに案内されて、CVTL スタッフ、リキサ県水道局責任者らとともに、険しい山道を登り工事予定地の水源まで辿りつきました。長老たちによって、水源に棲むと信じられている精霊に、工事を始めることの許可を求める儀式が行われ、豚や鶏が生贄として捧げられました。

今後 CVTL の給水衛生チームは、コミュニティに宿舎を確保し、工事終了まで現場に住み込んで、村人に保守管理方法の指導を行いながら、作業を進めていきます。また給水事業だけでなく、保健衛生指導、生計支援などを統合した包括的な支援が行われていきます。

(次ページ写真へ続く)



水源のある山頂は雲の中



道なき道をこえて山頂を目指す



現在使用されている竹を使った伝統的な給水システム



コミュニティの若者たち



儀式が始まるのを待つ長老たち



水源の精霊に生贄が捧げられる



伝統儀式の様子



在東ティモール日本国大使館での草の根・人間の安全保障無償資金協力調印式の様子